蒔繪通覧

坤

和装本

チ多 9
1437
2止

門 珍 9
1437
1-2

蒔繪通覽

下

蒔繪通覽

下

蒔繪師傳

○蒔繪の工業甚古くして古来の蒔繪の今に現存せる又尠からす然して其の工人の姓名及行状等の世に傳はらさるは實に惜むへき也今諸書を探り古老に尋ね僅に足利氏已降この工業に熟達せるもの數十名の事跡を知るを得たれは固陋を顧みすして小傳を作る

幸阿弥道長傳

幸阿弥道長は土岐四郎左衛門入道幸阿弥と稱し足利義政公に仕へ近江國栗本郡に小地を領し京師に住せり義政公嘗て道長をして蒔繪の技を學はしむ天質技術に長し幾ならすして名手となる道長の蒔繪は大抵高蒔繪の下繪は土佐光信にして研き出しの下繪は能阿彌相阿彌なり應永十七年に生れ文明十年十月十二日死年七十一 按に幸阿弥は氏にあらす道長入道して幸阿弥といへるなりさるを世人皆幸阿弥〻〻と呼ひしより土岐氏を稱せすして後には自ら幸阿弥を氏とせしならん系圖にも幸阿弥を氏とせし年月を載せす 其の子道清蒔繪の業を継き義政公に仕へ後土御門天皇即位の時の諸器具に蒔繪して妙手の名を得たり下繪は大抵能相土佐三人なれとも後には自ら下繪をなして一派の蒔繪を製出せり嘗て鼓の胴に蒔繪して義政公に献す公大に其の技を賞し半夜の硯箱を賜ひしと明應九年十月三日死道清死して宗金宗正宗伯継く宗伯の子長清永禄三年正月正親町天皇即位の時用ひられし器具に蒔繪しまた天平年間禁中の蒔繪をなして大に賞せられ天下一の号を賜はる此の時豊臣秀吉公より下さ

れし朱印左の如し

禁中并院御所蒔繪道具申附候間無異儀
仕立可申者也

天正十二年癸未三月十五日　秀吉

天下一
幸阿弥長清

長清北條氏直に籠せられ常に小田原三河大坂に往来して蒔繪の業をなす慶長八年四月廿六日死年七十五其の子長晏家を継ぐ幸阿弥家系圖左のことし

道長　土岐四郎左衛門入道幸阿弥
文明十年十月十三日死

道清　藤左エ門入道法橋道長の長子
明應九年十月三日死

宗金　法橋道清の長子
大永七年十月十三日死

宗正　弥三郎宗金の長子
天文廿二年十月十三日死

宗伯　法橋宗金の次子
弘治三年十月十三日死

長清　四郎左衛門入道法橋宗伯の長子
慶長八年四月廿六日死

長晏　久次郎入道長清の子
慶長十五年十月廿五日死

長善　藤十郎後に四郎左衛門長晏の子
慶長十八年十月四日死

長法　藤七郎長晏の次子
元和四年十月十三日死

長重　新九郎後に與兵衛
慶安四年二月廿一日死

長房　与次郎後に與兵衛入道長安長重の長子
天和三年十月廿四日死

長救　與惣四郎後に千兵衛始長好後に長道又長救と改む

此の系圖は長救か元禄九年に屋敷地を賜ふに止まる蓋し長救生存中に書きたるものならん古写本にして其の家にありたるなれは疑ひなき正しき系圖なり長救より後の系圖は或人の所蔵にして是れまた其の家より官に書上しものといふを写せしなり

長救　享保八年死

正峰　八郎左衛門

道該　万助後に長救

長孝 — 長周

長輝 — 長行

長賢

幸阿弥長晏傳

幸阿弥長晏は長清の長子にして蒔絵の名手と稱せらる十五歳のとき父と共に豊臣秀吉公の前に出てゝ香盆へ梅に鶯の下画をかき　蒔絵し

て上る公大にこれを賞し鶯かタツハ〳〵と言はれしとそ公頗る其の才を愛し堀久太郎秀政をして烏帽子親たらしめ名を久次郎とよひ景光の刀を賜ふ慶長五年蒔繪をもて徳川氏に仕へ俸給を賜ふ長晏二弟あり一は吉蔵幸阿弥長玄と稱し一は徳次郎幸阿弥徳安と稱す徳安は狩野風の画をよくし長玄は茶事を嗜しみ十九歳にして入道す最も蒔繪に長せり嘗て古田織部の需に應し厨子棚に蒔繪せり上段梅の古木下段三笑戸前紫垣外香包の圖これを織部棚と云

其の子長清細川三齋の蒔繪師尾崎宗印の養子となり蒔繪をなす嘗て禁中におきて土佐将監画く所の西行の画巻物を見て画風を變し更に新意を出し蒔繪の技を施す其の下画は大抵生物を本とし専ら黒粉を用ゐることに長せり蒔繪に黒粉を用ゐるは長清より始まる長晏死して長善長法長重継く長重の蒔繪精緻にして名手の稱あり其の有名の製品は寛永年間尾張中納言光友卿の室結婚の器具に源氏初音の巻を蒔繪せるなり　年月を松にひかれてふる人にそ

ふ鶯の初音きかせよの歌画を金銀彫物にせし其の手技頗る精巧也世これを初音の棚といふ
慶安四年二月廿一日死五十三歳

或曰く長玄か蒔繪の織部棚は後人摸造するもの多しといへとも其の技及はされは真疑一目して明か也と

按に初音棚は尾州家所蔵なれとも如何なる故にや其の中の一品今博物館にあり初音棚附属の品々は厨子棚黒棚乱筥眉作筥香盆銀龜甲葵紋散彫薫物壷六角薫物壷臺硯筥手筥大角赤小角赤色紙筥短冊筥渡し金筥長文筥文筥楊枝筥沈筥鉄漿筥昆布筥小櫛筥の類にして其中に入れたる諸品は一々掲くるに暇あらす此棚は寛永十四年に着手し三年間にして成工せしものとそ

古満休伯傳

古満休伯ははしめ安巨と稱し俗稱を久蔵と云其の父休意は京師の人寛永十三年徳川光家公のとき江戸に召されて俸禄をたまひ蒔繪工の

一家をなす休意死して休伯其の業を継き蒔繪業を継き蒔繪をよくす其の製優雅にして佳麗なるもの多し設漆緻密にして措金浮出し甚た精巧なり殊に其の黒塗の技は空前絶後の名手と稱せらる元禄二年幸阿弥長道と共に日光東照公の廟に蒔繪せり同十六年麴町に敷地を賜ふ子孫業を傳へ徳川氏の末年にいたる其の世々の製品これを古満蒔繪といふ古満家系圖大畧左の如し

古満久意 寛永十三年徳川氏に仕ふ 寛文三年九月死

久蔵 安巨後に休伯 江戸中橋に住す 正徳五年八月死

久蔵 後に休伯 正徳五年家を継く 享保十七年正月死

久蔵 宝暦四年家を継く 同八年十月死

久蔵 宝暦十二年家を継く 安永七年日光東照公宮殿蒔繪の損所を補ふ 寛政六年六月死

勘助 天明二年久蔵の養子となり家を継く 寛政七年八月死す

六右衛門 寛政七年十月家を継く 享和三年七月死

久蔵 始清左衛門後に休意 享和三年家を継く 同十三年閏八月死

源蔵 後に源亀 文化十二年家を継く 天保十三年三月死

清兵衛 天保十一年源亀の養子となり家を継く 安政五年六月死

清兵衛　弘化四年家を継く

此の系圖は蒔繪工柴田是真翁か美術雜誌の國華に載たるを畧記せる也

按に幸阿弥系圖に延寶八年東叡山とある将軍家綱公の廟を建てし時廟内の蒔繪は古満休意か施せしことを載せ又其の前に休意か紅葉山の佛殿に蒔繪せしことを記せり今この系圖を見るに休意は寛文三年死とあり延寶八年は寛文三年に後るゝこと十七年なり疑ふへし

又按に同系圖に元禄二年久藏安明幸阿弥奈良等十人とともに日光の宮殿に蒔繪し各其の姓名を寄數居にかき遺せしことを載せたり此の系圖に安明なし安明或は安巨の誤か疑ふへし

或曰く休意の祖は足利氏の時より幕府に仕へて蒔繪をなせしと或曰く足利氏の時既に古満家の蒔繪ありと

山本春正傳

山本春正は俗稱次郎三郎法橋舟木と稱す京師の人其の祖父弟春慶長五年伏見城にて戰死し春正に至り始めて塗師蒔繪を業とす其の子政幸業を継き姓を春正と改む其の子春継また姓名を改めて柏木伴、助といふ京師に住せしか其の子政今に至り尾州名古屋に移る子孫相傳へて今に至る世々の製品これを春正蒔繪といふ其の製は地質極めて堅硬にして漆面一点の汚なく精妙緻密にして種々の色相を現はし彩光頗る優美なり其の器物の内面および隅角を髹飾するに恰時間と勞力とを惜まさるか如しこれ好事家の最も貴重する所なり最研き出しに妙を得たりすへて春正の蒔繪とは金銀金貝を嵌入せし高蒔繪の類甚稀なり故に蒔繪の技を知らさるものは或は春山か蒔繪を輕々に看過して恰價の貴からさるもの、ことく思へと專門家は細視して嘆息其の技を賞美せさるものなしまた政幸か春継か詳かならされとも漆画をよくせりとそ

山本春正　次郎三郎法橋舟木京師の人
天和二年九月死年七十三

漆工傳統記に正令の又四郎正令藩主に隷して甲冑の調度を弁す其男東三郎正周髹漆をよくし正周の男次郎兵衛政章もまた髹術に長せり

政章　八左衛門常照と号す姓を春正と改む　元文五年九月死年八十七

春継　八左衛門姓名を改め柏木伴助といふ　明和七年五月死年六十八

正令　次郎兵衛寛政八年尾州名古屋に移る　享和三年五月死年七十

正徳　又四郎尾州侯に仕ふ　天保二年二月死年五十八

正周　東三郎　明治十年三月死

この系圖は近比春正の後山本某か愛知縣廳へ書上たるを畧載する也

按に幸阿弥系圖に元禄元年花山天皇即位に用ひられし器具は入札にして京師の春正次郎兵衛落札せし由を載せたり今この系圖によれは元禄年間に次郎兵衛なし正令次郎兵衛は享保年間の生れにして享和三年に死す元禄より享保の間二十余年を隔つ年代符合せり政章八左衛門もと次郎兵衛といひしか詳ならす

西人アーネスト、ハート氏曰く鑑定家は春正の蒔繪を珍重すれとも其の黒地の漆面に黄金を用ゐること少くして浮出形の絶てこれなきかため英國の蒐集家は却てこれを珍重せす日本の漆工および金工の中へ傳へたる

諺あり黄金の細工をなすものは意匠を熔壷に投すと是れ全く意匠なしとの謂なり蓋黄金の浮華を貴ふ無眼者流の項門の一針となすへし故に金工品の名作は鉄製にして漆工の名作は黒漆および精妙なる色相の漆器也とこれ實に専門家の言なりハート氏果して能くこれを知るか

梶川久次郎傳

梶川久次郎は元禄年前の人梶川彦兵衛の門人なり其の祖寛永年間蒔繪をもて徳川氏に仕ふ久次郎の技妍麗緻密にして描金の厚薄施色の濃淡奏技自在なり子孫世々其の業を傳へ江戸中橋檜物町に住し幸阿弥古満等と列を同くしす世々の製品頗る多し皆梶川の銘を付す世これを梶川蒔繪といふ西人ハート氏梶川家の蒔繪を評して曰く此の流の作品は時と才と良心をもて製造の最源となしたるものなりと稲葉氏は装劍奇賞の著述者久次郎を評して曰く印籠工古今第一の名人なり故に其價貴し此の人の作に重

の内に平目梨子地をなしたるものあり殊に見事なり元祖より今に至るまて其の名を落さす名家といふへし

按に梶川氏世々久次郎と稱せしならん稲葉氏いふところの久次郎は蓋し初代にあらす

余梶川氏製作の黒まき繪の木刀を所持せり黒蒔繪は金銀および色漆を施さゝる蒔繪也故に黒蒔繪と名つく所蔵の木刀は櫻花を一面に蒔繪したるものなり蓋し下地を朱漆にてもりあけ其の上に蠟色漆をかけたるものならんむねに梶川作の金泥字ありて印印あり又銘の上に篁園と錐の尖にて細く彫りてあり時代は元禄已後のものとおもはるこれかの金銀蒔繪の浮華をさけて黒蒔繪をなし己か蒔繪の技量を見せしものならん

> 扶桑名画傳に光悦片岡次郎太夫の三男也また本阿弥本姓は松田と有

本阿弥光悦傳

本阿弥光悦は寛永年間の人にして京師の產也太虚菴また自德齋徳有齋と号す佐々木家の族にして本姓は松田實父を宗春といふ本阿弥光

心やしなひて子となす其の子世〻刀剣の鑒定磨礪浄拭等を業とせり光悦皆これをよくし殊に浄拭に妙を得たり傍書をよくし遂に佐理道風の奇跡をさくり一家の風をおこすこれを光悦流と云時人光悦及近衛信尹公松花堂昭乗の書これを稱して三筆といふ又画をよくす始め海北友松を師とせしか後土佐の風をましへ逸格をあらはす世人稱して光悦風の画といふ其の遺跡草木多くして人物鳥獣は少なし墨画稀にして設色の濃画おほしまた茶を好み織部流を善くす茶家宗旦等を友とし頗る雅趣を得たりまた陶器製造を巧にして茶碗を製することに人争ふてこれを求む今も猶世に傳へて珍重せり又漆器製造に巧にして其の製作諸職工の意外に出つ見るもの驚嘆せさるなし其の雅趣ありて世人の賞美するは鉛錫青貝をもて蒔繪中に嵌入したるもの也後に洛北鷹峰の地を賜はり家を作りこゝに移る従来鷹峰は若狭丹波の街道にあたりて山峰重疊して人烟すくなし山賊多くこの處に住みて行旅をなやませしか

光悦か移るにおよひて盗賊こと〳〵く遁れさる光悦自ら寂院と号し晩に一寺を建立し光悦寺といふ光悦性質寡欲にしてよく人を慈む鷹峰に閑居せし時悉くその所蔵の器具を出たし中に就き其の佳品なるを撰ひこれを親戚朋友に分與し自粗品を収め茶を喫し自娯しむ其の言に曰く寶器もし損壊を致さは人をして樂まさらしむ尋常の瓷器の償ひ易きにしかさるなり光悦諸藝に通し風雅に富むるのみならす又經濟の才あり嘗て鷹峰に鑛坑五所を鑿ち近隣

同書に死年八十墨跡鑒定便覧に八十二本朝古今書画便覧に八十一とあり

の土民をして其の利を得せしむる多し寛永十四年二月三日死年八十光悦寺に葬る子なし光瑳を養子とし家を継かしむ光瑳の子光甫空中庵と号し法眼に叙せらるよく諸藝に長せり

太田南畝か仮名世説に曰く本阿弥光悦か行状記といへる書を人にかりて讀みしか光悦の藝一として其の妙手に至らさるはなし其の手習の反古をみしが一字をかづかぎりもなくうつしおきたりケ様に小致といへとも意を深く用ゐし由へ筆道も高く凡境をもぬ

け其外刀剣の鑒定茶事は遠州を學ひ文あり
武あり人となり一時の傑といふへし其の昔
京城の北鷹か峰は丹波につゞく山めぐり人
家稀にして樹木ふかく生ひしけりけれは盗
賊つねにこの邊にかくれて旅人をなやまし
京城なとへも入りしかは関東より厳命有て
光悦にかの地を賜はりこの所に光悦家居し
けれは夫より盗賊みな〳〵遁れ去りしこと
なりその武勇計りしるへし光悦かゝる人
となりしは其の母妙香といへる尼の教育に
よれりと

沼尻氏曰光悦の住みたる洛北鷹峰の地を今
光悦町といふ其の葬りし寺は法華宗にして
光悦寺といふと近ころ好古の士光悦の遺跡
を探らんとて鷹峰に趣きしか一の遺話なく
又一の遺物なし空しく杖を曳きて帰る光悦
の生前すてに其の平生珍愛する所の書画器
物を擲ちて去る後世何そ此地に遺物のある
あらんと遺話なく遺物なきは蓋し光悦の心
なるべし

按に光悦諸藝に通しことに一として秀出せさるなしもし光悦をして兵家たらしめはかならす甲越二将に譲らさるへし光悦をして政事家たらしめはかならす織田豊臣二氏に劣らさるへし惜哉其の胸中の技量を盡す能はすして徒に工藝の末技に隠遁して死す固より尋常の工人にあらさる也

堆朱平十郎

堆朱平十郎は本姓詳かならす慶長年間の人にして堆朱の技に巧なるをもて徳川氏につかふ子孫世々業を継く足利氏の時京師の工人門入たる者あり始めて堆朱を製造せり其の法は全く支那製を摸造せしものなり先つ朱漆または黒漆をもて厚く塗りあけしかして山水花鳥人物等を彫刻せり平十郎は蓋し門入の業を傳へたるならん万治年間堆朱楊成なるものあり巧に堆朱を製すこれ蓋し平十郎の後ならん享保年間京師の人堆朱屋次郎左衛門なる者あり又江戸に堆朱養清なるものあり肥前長崎に堆朱

按に文政武鑑に御青貝堆朱師野村次郎兵衛堆朱楊成とあり堆朱は神田小柳町に住す

勤七なる者あり皆堆朱工の名手也
按に堆朱氏は堆朱をもて専門となし古満五
十嵐の蒔絵工と共に世々徳川氏に仕へし名
家なり今傳を傳ふ又按に堆朱は漢名剔紅藝
苑日渉に曰く剔紅或謂之彫紅即雕漆也偽造
者曰堆紅或謂之罩紅俗稱名堆朱江戸有楊成
者也以善彫漆隷于官余嘗問其所業曰元有張
成楊成周明家世傳其法其品目頗夥曰剔紅（紅漆
為地以硃漆堆起三十余層刻人物樓臺花卉翎毛又連環）曰堆紅（硃漆黒漆層々堆起
刻痕有細黒糸線燒）曰堆烏（黒漆中層々有細紅糸多刻作連環）曰堆漆（全用黒漆
刻作連環及花卉）曰桂漿（黄漆為地以黒漆堆起中有細層細紅糸）曰紅葩線
葉（用彩漆刻花卉翎毛）曰金糸（黄黒珠漆重疊堆起）曰剔金（黄漆黒漆重疊堆起）
曰犀皮或名松皮（硃黄黒漆重疊堆起罩以黒漆刻連環差淺且漫）此其
大畧也 按に堆朱の一種に具梨金麻あり具
梨は即犀皮なり金麻は同書に曰く一種以彩
漆斑斕繪円花児而不剔者亦名西皮同話所載
是也俗謂之金麻塗
或曰く楊成は訓みてヨンゼイといふへし按
に同工に善清ありてまきるゝ故か

漆工傳統記に五十嵐他次郎の祖は西京にて著名の蒔工五十嵐信斎の三世道甫の門人にして五十嵐を氏とし世々金澤藩主の調度を製造して俸禄を受又曰く道甫は足利義政時代の名工にして五十嵐信斎三世の孫也道甫最後金澤に来り俸禄を受更に居住す其子又道甫と稱す
按に五十嵐氏數世金澤にありしが後江戸に召され徳川氏の蒔繪工となり則家を残したるものならん

五十嵐太兵衛傳

五十嵐太兵衛は徳川氏の蒔繪工にして江戸に住す寛文九年幸阿弥長房と共に京に入りて鷹司教平公の女入内の時の器具に蒔繪し又長房と共に甲府源綱重卿か結婚の時に用ゐたる器具に蒔繪し又日光山宝物箱の上書付をなせし當時の名工也子孫業を継く

按に足利義政公の時五十嵐某あり又豊臣秀吉公の時五十嵐道甫なるものありこれみな太兵衛の先なるへし蓋し足利氏の時より世々蒔繪をもて相継きたる名家ならん今傳を失ふ惜むへし

人倫訓蒙圖彙に五十嵐は東山殿の時の名工なり将軍慈昭院義政公蒔繪を愛したまひて五十嵐にかゝせ給へり今に至て時代物と稱し東山殿御物と号して世上の寶とす其の様比類なきものと見へたり

黒川氏和漢諸道具見知抄を引きて國華に載せて曰く信長時代太閤時代五十嵐京蒔繪師

也上手と見へたり足利執政の比より世襲のものなるへし

幸阿弥長救傳

幸阿弥長救は道長の後孫にして長房の長子也始長好といひ長道と改め後又長救と改む俗稱與兵衛貞享元年徳川綱吉公の女紀伊中將綱教卿と結婚せし時其の器具に蒔繪し又この時諸侯より其の婚儀を祝すとて幕府に奉りし諸器具に蒔繪せり元禄二年日光東照公の宮殿に蒔繪することを命せられ奈良貞利古満安巨等と共に工枚を施す鈴木正之栗本茂利同正俊梅原重壽円阿弥武宗服部永貞等またこれに預り各其の姓名を宮殿の寄敷居にしるして後に遺す同年綱吉公筆する所の護持院の額に蒔繪し同三年同公筆せし大成殿の額に金粉鑞粉を研きつけ同四年同公柳澤保明の邸に行く其の當日用ゐる所の諸器具に蒔繪し同五年同公再ひ柳澤氏の邸に行くを命し諸侯をして其の日用ゐる所の諸器具を献せしむ此の時長救製する

ところの蒔繪の器具凡百有余品みな梨子地高蒔繪等にして鮮麗を極めたり徳川氏の世蒔繪の業ゝ盛なるは此の時をもて第一とす同九年徳川氏長救に屋敷地を賜ふ享保八年死

按に本傳に載せたる奈良鈴木栗本梅原円阿弥服部の諸氏はいつれも〱徳川氏の扶持せし蒔繪工にして皆當時の名手なるへし今其の事跡を探るを得さるは遺憾と云へし

青貝長兵衛傳

青貝長兵衛は長崎の工人なり元和年間同地に生島藤七なるものありよく螺鈿の漆器を製す長兵衛其の技を傳へて螺鈿に巧なり殊に青貝を漆器に嵌入することに妙を得たりこれよりさき我國の螺鈿は皆あわむ貝および薩摩の屋久島産の青螺をもて嵌裝せしものなりしか長兵衛技を支那人より傳へて青貝のみを用ひて美麗なる器物を製出せりこれより工人一に螺鈿器を指して青貝細工と云ふ

生民傳に云く生島三郎左善二蕃画一傳下之蕃人任二

彼地一者上而得二其妙其弟藤七能為二螺鈿一且巧二百技一
兄弟倶擅二名于世一又云く青貝氏長兵衛能為二螺
鈿一給レ食云々長兵為レ人別而好二讀書一雖二造立之次一
不レ輟レ食而讀レ之云々
按に我國螺鈿の製は其始詳ならされとも傳
へて甚古し孝謙天皇の時既にこれあり工藝
志料に天平勝寶八年孝謙天皇彈臺盤（碁を彈く盤也）
和琴（六絃の樂器なり）箜篌（廿三絃の樂器也）琵琶（四絃の樂器なり）等
の數品を東大寺に寄附す並皆螺鈿玉琱瑁水
精をもて嵌裝せり又背面に螺鈿を嵌する所
の円鏡を寄附す並にみな其の寶庫中に納む
其の製たるや高妙雅致なり當時その技既に
精巧を極め名工も亦少なからさりし事以て
見るへしと蓋し螺鈿は支那より傳はりしも
のならんされと支那のいつれの代に始まり
しや確証なし藝苑日渉を閲するに方句か泊
宅編を載せて曰く螺鈿器本出二倭國一物象百態
頗極二工巧一非下若二今市人所レ售者上と我にありては
彼を本とし彼にありては我を本とす疑ふへ
し今しろして世の博古家に質す

青海勘七

髹飾録曰漆画即古昔之文飾而多是純色画也又有施丹青而如画家所謂没骨者古飾所一變也今之描漆家不敢作又有朱質朱文黒質黒文者亦朴雅也

青海勘七は其の姓氏詳ならす江戸の人元禄年間の名工にして漆画をよくし殊に波文を描出するに巧にして画意生氣あり故に世人稱して青海勘七といふ後に其の波文大に流行して衣類に染め出し陶器に染め付けまた諸器に彫刻すこれを青海波といふ勘七か画き始めしをもてなり勘七の作るところの蒔繪は其の實は漆画にして蒔繪にあらされとも當時の人皆これを呼ひて蒔繪といふ

按に漆画は自蒔繪と異なるなり後勘七の技を傳へ諸の彩漆をもて絹および紙に人物花鳥等を画くものあり奇は即奇なれとも雅味なし余漆画を見ること屢なるか中に就き或人所蔵の漆画の屏風甚妙なり全唐紙へ猩々を画き朱色金色燦爛眼を射る只おしむへきは落款なかりし鈴木白藤か浮世繪類考増補に漆画に大和繪師秦川重利なるもの有云々又鳥居流の画師に清忠あり漆画の武者役者

似貝等をよくす云々現今の名工柴田是真翁画く所は別に一機軸を出たせるか如しかの襖紙および皮革に漆をもて花紋等を画くもの是また漆画の類也

按に漆画の技は甚古し工藝志料に云く延喜五年醍醐天皇制して朝廷に於きて齋會を修するの時の器具を定めて漆画の花盤十六口となす漆画の書冊に見ゆるものは此をみて始めとなすと又いわく高倉天皇の時南部の工人南部椀を製出せしが黒漆の上に彩漆をもつて花鳥等を画き頗風致あるもの也と

治五左衛門某傳

治五左衛門某は越中の人なり嘗て鎮西に遊び支那人より漆画の妙技を傳わり帰りてこれを製し業となす世呼こて城端漆画といふ同國砺波郡城端におきて製するをもて名つく其の製は黒漆に各色のうるし或は五彩の密陀僧をもて画きたるも也

此の僧工藝志料に據りて作る某の年代詳か

ならす只傳へて文明年間浄土真宗の僧祐玄なるものあり本願寺の僧蓮如とともに越中に来る某は祐玄の孫也といへるのみ

小川笠翁傳

小川笠翁は俗称平助破笠と号しまた卯観子と号す伊勢桑名の士にして兵法に通し叙術に達せしか後これを棄て、専ら工藝に従事し画を好み狩野の風をしたひ最彩色に妙を得たり又芭蕉の門に入て俳諧をよくし又製陶に巧みに

延享四年六月三日死
照院仙岸笠翁信士
俗名 小川宗為 破笠事
妻にもと幾人思ふさくら狩

して又彫刻に巧なり殊に漆髹の術に長せり其の製する所の蒔絵は本阿弥光悦に倣ひ更に新意を出たし陶器あるひは鉛錫牙角の類をもて諸物象を作りこれを漆器中に嵌入せしめ精巧人をして驚かしむ専ら金銀の装飾をいやしみ實價なき物品に巧技の精妙を加へ風致を生せしむ延享四年六月三日江戸桐町の家にありて死す年八十四（一に八十五）一説に破笠は江戸の人蕉門に入りて俳諧をよくす壮年放蕩にして四方に周遊し信州木曽山中に至り嚢中一銭の貯へ

なく路傍に起伏し殆と乞食の姿となり自おのれか姿をかへりみて「乞食にはかくはなられぬ案山子かな」これより破笠と名つけしと江戸に帰りて寶井其角か家に寓す一説に破笠姓は小川名は觀字は尚行幼名金弥後に平助と改む長沼流の兵法を學ひ貫觀子と稱す兵家者流毎朝卯時天地の氣を窺ふを法とす故にかく稱せしとそ漆髹繪蒔陶冶等の諸技術は緒方光琳及ひ乾山に就きて學ふ性豪放不羈にして世事をかへりみす晩に落魄して両國橋の畔に手遊の人形を作りて糊口せり偶津軽侯其の人形細工の非凡なるを見てこれを賞し扶持を與へ士籍に列せんとす近臣拒みて曰く士人の技藝あらは即可なれ彼は唯一塊の玩物を製するに過きさるなりと侯人をして翁のことを探らしむるに翁自長沼流の兵法をよくすといふ即召して兵書を講せしむ辯舌流るゝかことし一家の士皆驚くよりて扶持して士籍に入らしむ翁津軽侯に仕へ侯の手道具および其の女の婚儀の諸器具に蒔繪して人目を驚かす

翁の蒔繪は津軽侯に仕へし比最妙也

と後に發狂して一室に閑居し竹をもて柱時計を作る其の報刻かの金物製のものに異ならす時計落成して病全く愈ゆ翁俳家其角嵐雪と友たり嘗て二子の故人となりしを悼みて「三人て巨燵に寐たか夢なれや」笠翁の門に望月半山有蒔繪をよくし後に二世破笠と稱す初世に比すれは其の製作緻密也亦良工の名あり

西人ハート氏笠翁の蒔繪を稱して曰く日本の工藝家は光琳を除くの外多くは古傳の圖画を摸すること常なれとも此の笠翁は主として自家創始の技を施し日本漆工史上に一新時代を開きたりと按に自家始の技を施せしもの固より光琳笠翁のみにあらす然れとも二人の製作は最新意を出せしものおほしハート氏の言亦宜なるかな

又曰く此に陳列する破笠か硯箱および文箱は陶器を嵌入して物象を描出せりこれは他人の所持なれとも其の價は二百五十磅なりと蓋し怪むに足らす真に日本美術の標準とすへきものなれはなりと

稲葉氏評して曰く観子破笠は江戸の人上手なりこの人のまゝ繪はかならす樂焼または堆朱又は漆角なるをあしらひ仕立ること常なり甚た風雅なるものなり是れまた一家といふへし

浮世画類考に小川氏名は尚行卯観子と号す又夢中庵笠翁俳名宗宇平助と稱す高嵩谷の門人にして浮世画をよくす

按に笠翁諸藝に通し光悦をしたふ其の技或は光悦に劣らさるへし翁は蓋し慷慨の士志を當時に得すして双刀を擲却し風流三昧の身となりしなり晩年津軽侯に仕ふ蓋しその志にあらす貧しきか為ならん蒔繪の技のごとき人皆賞嘆すといへとも已にありては蓋し一末技とするに過きさらん

八兵衛宗哲傳

八兵衛宗哲は一に八郎兵衛中村氏一名公遊漆翁と号す勇山と号し又方寸齋と号す延寶年間の人也其の家世々塗師を業とす宗哲風雅にして俳諧

慶長年間武野方寸齋なる人あり茶家紹鷗の男也

酔古集に中村宗哲名は公遊号方寸齋又号漆翁代々同名八郎兵衛宗哲より千家塗師となる是延宝中也
漆工傳統記に初代宗哲は正保年間に業を起し千家三派の茶器製造工と成三代宗哲は宝暦十二年後櫻町天皇の御即位の器具調度を製造し爾後漆器描金常納の命を受年七十にして七種の棗を製す世之を賞して彭祖のなつめと云天保年間尾州侯七代宗哲に得玄の号を与ふよりて号とす

を好み蒔繪をよくす其よき繪はかの金銀嵌入の浮華を賤しみ專金銀を用ゐざる蒔繪をなす後茶道に入て千家の塗師となる

按に宗哲の夜櫻蒔繪は前後空絶の技にして後人これに倣ひ製せんとすれとも能はす其の製は平なる蠟色塗の中へ黒色の櫻花をかすかに現はしたるものなり時としてなつめ杯にこれあり

又按に黒蒔繪あり暗夜まき繪あり黒蒔繪は地をもりあけて黒く蒔きあけたるなり宗哲か製せしは即暗夜蒔繪也意匠頗る高尚なるものなり

緒方光琳傳

緒方光琳は名を方祝又道崇といひ寂明澗聲伊亮青々堂長江軒壽の号あり俗稱雁金屋藤重郎京師の人緒方宗謙の子なり始め画法を狩野常信に學ふ後に本阿弥光悦の風をしたひ書画およひ蒔繪をまなひ新意を出たし自一家の風をおこす蒔繪の製は漆器中に鉛錫青貝を嵌入し

描金黄緑の奇色を現はし意匠幽雅にして風趣ありこれを光琳蒔繪といふ享保元年四月六日死す年五十六京師小川頭の妙顯寺中本行院に葬る西人ハート氏光琳蒔繪を稱して曰くかの書画の妙と塗漆の巧とを兼備し日本美術の一新時代を開きたる大家なりとこれ過譽にあらざるなり稲葉氏評して曰く法橋光琳は光悦の門人にして風流の好士なり画をよくす亦一家をなす印籠は光悦好みの形なるよし其の蒔繪は所謂光琳蒔にして金貝青貝にて形を摸し地を粉にてうつみ内も梨子地を用ゐす即金粉濃なり銘は蓋のうらに錐の尖にて引きたる如く細々と其の名をしるすと光琳の弟乾山また蒔繪をよくし陶器の名手なり後に永田友治なる者あり光琳の風を慕ひ蒔繪を善くし名手と稱せらる

按に稲葉氏光琳をもて光悦の門人とするは誤なり光悦は寛永十四年に死し歳八十光琳は享保元年に死して歳五十六名家年表その他諸書に詳かなり今光琳を五十六死として

其の生年を算すれは慶安三年なり慶安三年は寛永十四年を距ること十有三年なり光琳何そ就きて學ふの理あらんや是等は識者の能く辨する所なれとも世に往々稲葉氏の説にまよひ誤るものあれは記し置ぬ

按に緒方一に尾形に作るは誤り也東京下谷坂本一丁目某寺にある屠龍公子抱一か建てたる光琳の弟乾山の碑に緒方としるしあるをもてしるへし

按するに蒔繪の術たる意匠に冨むと雖も手技に長せされは完全の蒔繪を製する能はす手技に長すといへとも意匠に乏しけれは亦完全の蒔繪を製する能はさるなり意匠と蒔繪と且冨み且長せるは夫れ惟光悦光琳破笠の徒ならんしかして三子の人となり畧相同しきも亦可ならすや

光琳家譜

尾形光謙　字柏子宗甫弟号洗齋小字主馬東福門院御呉服掛貞享四年死年六十四

藤三郎

市之進 名惟宣 万治元年戊戌生 父家謙隠居受家此時家頗饒 従幼好画 始狩野常信 後野村宗建 号光琳 青々堂 長江軒 字寂明 後稱方祝 元禄十四年二月十七日叙法橋 住小川御池北 晩住洛北野馬口北山町 享保元年六月二日死 年五十九 葬妙顕寺中本行院 文政二年己卯十一月抱一上人築墓 法号長江軒青々堂光琳居士

権平 名惟元 稱深省 号乾山 有紫翠老人号 住洛西鳴瀧村 陶器製造 寛保三年亥四月死

女

女 次郎三郎 松屋三右衛門養子 — 女 — 辰二郎 某養子後

女 小西彦九郎 — 勝之丞 — 才次郎 大坂石井松右衛門養子 家号

女 河内屋

蒔繪師清兵衛傳

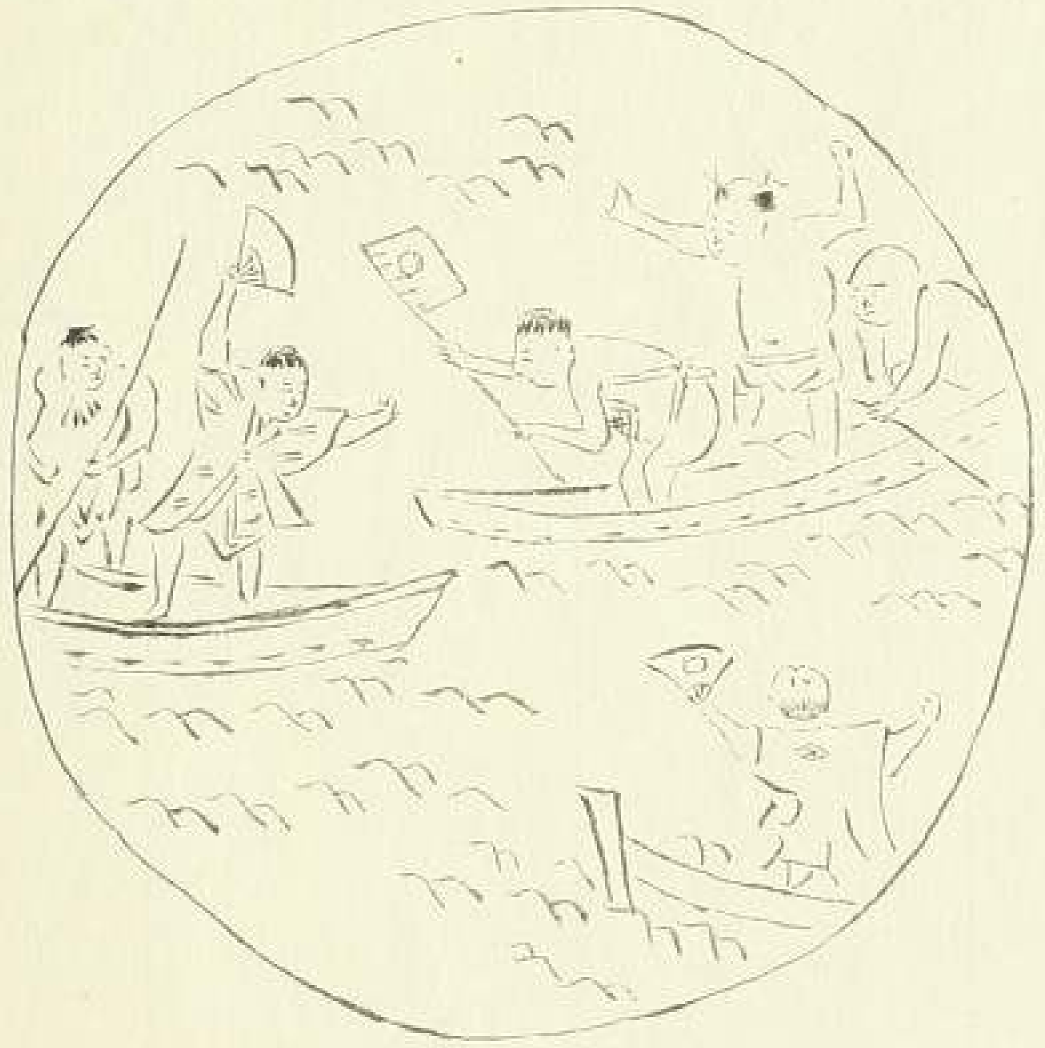
清兵衛は其の姓氏詳ならす大坂伏見町邊に住せし人なり寶永年間の名工なり最も印籠を造るに巧なり世に清兵衛のバラ印籠と稱し賞翫するものこれなりバラ印籠とは重ねとハラ〳〵にして合はすに下を上の重ねに合はせ裏をおもてに合はせても其の工合シツクりとして同し様なれはいへる也清兵衛後に江戸へ召されしか箱根の宿にて病て死す惜むへしと装劍奇

賞に見へたり

蒔繪師源三郎傳

瓦礫雜考に
描金画斧巻二
五節句のことを
五ッ組危にかきたる模様也

五月いんじの圖
きそいふね
かくの如く也



蒔繪師源三郎は姓氏詳ならす京師或は奈良の人ならん専ら蒔繪を業とせしか傍浮世繪に長し描金画斧五冊を著はす

按に浮世繪類考に醒世翁源三郎のことを述へて曰く元禄五年の刻本に此の名あり西鶴か作の讀本の指画は名を著はさすと雖も多くは此の人の画なりとよりて考ふれは源三郎は貞享元禄比の人

按に退私録に奈良の天蓋といふ所に塗師屋源三郎といふものあり云々新井白石その家

虚心按に文政武鑑に御印籠師山田常嘉南塗師町にあり徳川氏に仕へし印籠師ならん

にて珠光か所持せし徐熙の鷺の画を見たることを載せたり源三郎は蓋しこの蒔繪師の源三郎ならん

山田常加傳

山田常加は始め寺田氏江戸の人南塗師町に住す印籠蒔繪の上手なり天和三年徳川氏の命を奉し幸阿弥長房とともに印籠香箱の類を製するおほし

塩見小兵衛刑部太郎傳

書名并年代詳かならさる板の画手本に小兵衛か画きたる午の圖あり画法狩野かれ共少しく異なる所あり落款は蒔繪師塩見小兵衛政誠とあり

塩見小兵衛政誠は寶永年間の人にして京師に生る研出し蒔繪の名工にして其の技美麗なり亡友榊原芳野政誠まき繪の重箱を蔵せしか研き出しの手際最も妙なり今なを存するや否同時刑部梨子地を製せし大に世に行はる或曰く江戸の工人刑部太郎の創製せしものならんと其の製平目梨子地の如く施す所の金片を平に現はしたるもの也

象谷の俗稱は敬蔵

玉楮象谷傳

玉楮象谷は讃岐高松の工人にして寛政年間支那製の漆器にもとつき一種の髹法を發明せり其の製は竹籠或は木器をとて木質とし黒漆又は朱うるしを塗り極めて密なる細花章を彫り色漆をもてこれを塗り填めたるもの如して頗美麗なり其の子藏黒また此技に長す子孫傳へて今に至る

按に文化年間尾張の工人象眼塗を發明せり其の製金銀線をもて鳥獸花草を器物に嵌入しこれに黒漆を施ししかして研出したるものなり即象谷塗の一種にして可ならん

二宮桃亭傳

二宮桃亭は江戸の人にして醫を業とす傍沈金を善くす沈金は漆器に陰文を彫りて金末を施したるものなり蓋し支那の創造ならん長崎の工人よくこれを製す桃亭は鼠の牙をもて刀にかへ彫りしといふ精巧目を驚かす寛政年間の名工なり

輟耕録に云く嘉興斜塘楊滙髹工鎗金鎗銀法

凡器用什物先用黒漆爲地以鐡刻畫或山水樹石或花木翎毛或亭臺屋宇或人物故事一々完整理然用新羅漆若鎗金則調雌黄若鎗銀則調韶粉日曬後角挑嵌所刻縫罅以金簿或銀簿依銀匠所用紙糊籠罩置金銀簿在内遂旋細切取鋪已施漆上新綿揩拭牢實但著漆者自然黏住其餘金銀都在綿上於熨斗中燒灰甘鍋内鎔鍛渾不走失按に沈金漢名鎗金鎗銀槍金戧金刻金といふ其の製いつれの時に始まるを知らす

豊助傳

豊助は其の姓氏詳ならす文化年間の人にして尾張名古屋に住し善く樂燒を製す後に一種の髹法を發明す即樂燒の外面に漆を施し其の上に蒔繪したるなり世人これを稱して豊助樂といひ愛玩するもの多し

蒔繪師市太夫傳

市太夫は其姓氏詳ならす其年代も又詳ならす

前田家の印籠師にして加州金澤桶町に住す江戸の工人清水源四郎の門人也（源四郎製する所の印籠を相の間と稱へ世人珍重せり）專印籠を製し別に一家をなす世これを加賀印籠といふ蒔繪美麗にして且精巧也傍茶事を嗜み香合を製す世に加賀蒔繪の香合と稱するもの多くは此人の作なり子三人あり皆蒔繪をよくす長を藤蔵といひ傍幸流の鼓をうつ次を友之進と云善く笛をふく次を市之丞といふよく太鼓をうつ此の如く父子四人みな風雅なるは世に珍らしと人皆評しあへり

古滿寛哉傳

古滿寛哉は本姓坂田俗稱重兵衛後に坦叟又坦哉といふ木村巨柳の門人なり巨柳は安永天明頃の人にして古滿休伯に就き蒔繪の業を學ひ後休伯より古滿の姓を稱ふことを許され古滿巨柳と稱す名手なり寛哉巨柳に就き蒔繪を學ひ頗る古滿家の髹法を得たりよりて又古滿の姓を許さる天保六年四月廿日死寛哉蒔繪の餘暇狂歌を好みしとそ

寛哉嘗根岸に住せし事あり墓は入谷正洞寺にあり

按に木村氏古満家の技術を傳へて又坂内氏に傳ふしかして古満家の正統は久蔵源蔵清兵衛相継くされは同家は分れて二となりたる也巨柳より以来の畧系左の如し

巨柳 木村七左衛門休伯の門人江戸住吉町に住す後に古満氏を稱す

寛哉 巨柳の門人坂田重兵衛後古満氏を稱す寛政四年十月二日死

寛哉 寛哉の養子坂田重兵衛天保六年四月死

寛哉門人 大村玉山

同 野村休甫 源三郎印籠師野村九圭の跡をつく

同 柴田是真

按に古満系圖に巨柳好みて機械人形を造りしといへり或人巨柳か蒔繪せし印籠を蔵せるか青貝を嵌せる手技頗光琳に似たり

原羊遊斎傳

原羊遊斎交山と号す神田下駄新道に住す一輪椿蕣の花すゝき桔梗の草花の類よく光琳風に倣ひて巧妙也足弱くして常に駕にのりて華主を廻りしとぞ後に剃髪して自神田の和尚と号せり
酒井道一氏の話に羊遊斎根岸雨花庵の隣に別邸を構へ一時住せし事有

原羊遊斎は文化文政頃の人にして江戸神田鍛冶町に住し光琳風の蒔繪をよくす故ありて姫路の酒井氏に寵せらるゝよりて蒔繪の下画は大抵屠龍公抱一にして金粉をおします其の製頗美麗なるもの多し

按に羊遊齋の蒔繪は專法橋光琳を慕へるか
ことし
老工長翁曰く世に羊遊齋の蒔繪と稱すれと
も羊遊齋は自ら蒔繪せしこと少し皆門下の職
工に命して製せしめおのれは唯其の製の佳
なるものを撰ひ銘のみをしるしたるのみ予
も一時羊遊齋の門に入り專ら粉蒔に從事せ
しが其の頃の蒔繪師金粉をおしみて大抵自
身に蒔きたるものなるか羊遊齋は一々門人
に任し最も多量に金粉をまかせしと蓋し羊
遊齋は蒔繪に長せるのみならすよく職工を
使ふことに長したる人ならん

家原自全兒島新七傳

享保年間家原自全なるものあり蒔繪の時代を
鑑定することに妙を得たりよりて當世の貴顯
高門の寵遇を得たりしと又明和年間兒島新七
なるものあり印籠の鑑定に妙を得たりしとそ
稻葉氏曰く余弱冠のころ江府へ下りしとき
數寄屋河岸に住する兒島新七といふ人梶川

古満なと上作の江戸印籠を目利することゝき口授せらるゝに総て上作のものを見極むるにはかの清兵衛のバラ印籠の如く合せ見て其の肯綮を得るをもて上印籠の約束とすへきよしを教へられしを承けてこれを試るに違ふことなしすへてこの意を得て鑒識せは十に八九まて誤ることなしこれ商家の秘といへとも児島氏の切者なりしを世に告けんかためにこゝに記しぬと

蒔繪工雜傳

古来蒔繪の工人極めて多し其の中かならす奇手妙技の徒尠からさるへし然れとも其の事跡の傳はらさるを如何にせん或は其の製品僅に存して其姓名の後に傳はらさるものあらん或は其の姓名は残れとも其の製品今に存せさるもののあらん或は其の製品姓名ともに失せて世人の知らさるもののあらんと諸書に散見せる工人の姓名を擧て示す事左のことし

安元元年蒔繪師則季平文師清原貞安なるものあり後白河上皇これを召れ壽永三年蒔繪師右衞門少志紀助正および中原末恒平文師散位清原貞光および清原貞安あり後鳥羽天皇大嘗會に用ゐる器具を作らしむ正和四年蒔繪師佛成助時稱覺良円貞惠蓮月國光妙蓮平文師光阿禪法是法善法心性行則顯性見阿實時光守等あり朝廷召して近江國日吉神社の造營に從事せしむ寶德年間五十嵐某あり足利義政命して多く蒔繪を製せしむ天正年間京師の人五十嵐道甫

田付孝則は画をよくす嘗孝則か画たる菅公の像を見たり

なるものあり同時京師の人長府なるものあり
また年代は詳かならされとも稲葉氏記すると
ころの蒔繪師の姓名は加兵衞（京都の人）の田付孝則
同せう女（江戸の人）桃葉齋源六同野村九圭次は又
と稱す（同）同樗平次郎兵衞と稱す（九圭の弟）四阿彌
丹後蒔繪美麗にして名手なり（江戸神田永富町に住す）望月
重藏（江戸の人）狩野十旭名は建元木村氏文次郎と
稱す（同）桑野不幽名重春木村氏甚右衞門と稱す
（同）温古長寬齋覺[illegible]（ママ）齋と号す（同）土田半六（江戸赤坂に住す）
鈴木正義（京師の人）扁額軌範に上御靈に鈴木正義

か奉納せし印籠の額を載す中は寶暦十庚辰年林鐘吉日御蒔繪師願主鈴木庄左衛門制作之正義印籠の画は冨士にして根付は團扇なり塩濱の画あり安川某名は詳ならず大坂の人蒔繪師市兵衛加州金澤の人等なりまた幸阿弥系圖に載るところの姓名は栗本宗清幸阿弥宗全の三男新意を出たし蒔繪の風を一變す享禄年間の人なり尾崎宗印慶長年間の人梅原久音寛永年間の人栗本太郎右衛門同源左衛門幸阿弥長清の子永禄年間の人にして菱田甚右衛門の祖也菱田榮休房貞奈良八郎左衛門雪勝鈴木弥左衛門正備栗本太郎右衛門志屋同源左

衞門信親榎本又左衞門寛継梅原七郎左衞門重壽円阿弥又五郎武宗小幡千左衞門政次菱田源之丞□□（延寳年間の人）幸阿弥又左衞門□□藤田三郎右衞門為正菱田甚右衞門□□（寛文年間の人）鈴木弥左衞門正之奈良八郎左衞門貞利栗本太郎右衞門茂利栗本源左衞門正俊服部庄太夫永貞奥村四郎兵衞嘉之桑山八郎左衞門與利等なり又湖月翁か記せしは清水道興春笑等也（春笑は宗旦の時代宝永頃人）蒔繪大全に京師の工人釋迦提婆等の名あれと綽名にして姓名及事跡詳ならす

澤本一國齋俗稱庄兵衞尾州名古屋の人

寛政已後蒔繪の名手は古満寛齋原羊遊齋を除きて井上白哉中山胡民（羊遊齋の門人）及ひ當時の柴田是真（寛哉の門人）の小川松民等あれと其の傳は他日補ふへし

按に文政武鑑に御細工所預支配御蒔繪師并塗師十人扶持皆川町二丁目幸阿弥因幡五十俵二人扶持皆川町三丁目栗本宇右衞門四十俵二人扶持皆川町二丁目菱田八十八二百五俵二斗五升九合坂本町二丁目奈良土佐二十五俵二人扶持赤坂新町四丁目榎本筑後五十

俵二人扶持新石町一丁目粟本祐之丞五十俵
二人扶持皆川町二丁目鈴木伊賀神田永冨町
円阿弥筑前上槇町古満久蔵呉服町新道服部
清右衛門新数寄屋町大藤長十郎関数馬京橋
弓町野村四郎右衛門

附

塗師傳

夫れ塗師の業ありて蒔繪師の業あり蒔繪は末なり塗師は本也故に蒔繪をなすものは塗師の業を知らすは有へからす徳川氏の世宮殿樓閣落成祝式の時諸職工の順序は塗師を上とし蒔繪師を下とす是其の工業の本末を明にする所以也予蒔繪師傳を作る塗師傳なかるへからす抑塗師の業たる蒔繪の如く燦爛目に輝くものに非れは人よく其の工業の

巧拙を辨する者甚少し故に古来妙工名手の出る蒔繪師よりも多しとす其名後に傳はらす甚惜むへし足利氏已来點茶の式盛に行れ塗師の業従て起る今諸書に就き其已降の名工數人の事跡を探りて蒔繪師傳の後に附す

春慶傳

春慶は姓氏詳ならす後亀山天皇の時の人なり泉州堺に住し漆工を業とす一種の髹法を發明して漆器を製出すこれを春慶塗といふ其製は米糊に砥の粉をまぜたるを木地に塗て目とめをなし次に濃くときたる雌黄をぬり又薄澁を引きて乾かし其上を吉野漆にてすり漆せしもの也（製法は漆器製造法に載す）

黒川氏曰く春慶の前かくの如き髹法なきにあらす東大寺に蔵する所の屏風の襲木は則この春慶塗に類す又土佐國安喜郡の東寺に蔵する所の大般若經の唐櫃も亦これに類すしかして春慶をもて此の髹法の名稱となす事は春慶の製する所のものは古来所傳の髹

法に勝るをもての故ならん

珠光傳

珠光は姓氏詳ならす香樂庵と号し休心法師と稱す幼名茂吉奈良の産にして文明年間の人也故ありて幼少にして稱名寺の僧となる固より凡骨に非さるを以て廿余歳にして住職となり三十余歳にして紫野大德寺に至て一休禅師に學ひ佛理の蘊奥を極む一休甯圜堂禅師の墨跡を示して茶は心眼を覺し我宗禅定の一助なりといふ珠光これより點茶に志し遂に茶道中興の祖と稱せらる時に足利義政公其の點茶の術の頗幽趣妙味あるを賞し珠光をして還俗せしめ三條の邊に草庵を設けこれに居らしめ自就て點茶を學ひ珠光庵主の額面を書して與ふ歳八十にして死す徳大寺真珠院に葬る我國茶道の宗匠と稱するは實に珠光より始る珠光點法に巧にして點茶の餘よく漆器を製せしとそ

退私録に新井君美の話を載せて曰く茶の湯に名ありし珠光は浄土宗なる永觀堂の末寺

にて南都の稱名寺の僧なりしよし天蓋と云所に塗師屋源三郎といふものあり其家に珠光か所持せし徐熙の鷺の画ありし云々

羽田五郎傳

羽田五郎は足利義政公時代の漆工にして奈良の法界門の邊に住みよりて人皆製品を指して法界門塗といふ事茶器を製す其製出中著名なるは羽田盆にして盆の内外を真塗にせし名器なり或曰く棗の茶入は五郎か創めて製出せしと同時泰阿弥清阿弥等あれと其事跡詳ならす

盛阿弥

織田豊臣二氏の時にあたり戦乱の余點茶の禮盛に行れ紹鷗利休織部の徒各新様の漆器を製せしめて茶宴の用に供す京師の工人盛阿弥成者あり同工與三と競ひてこれを製す其製堅緻にして髹法頗る巧妙也茶人と傳へて珍重せり

篠井秀次傳

篠井秀次は俗稱弥五郎善齋と号す奈良の人也茶家紹鷗の常に命して諸器を造らしめたる漆工にして製品極て精巧也二世秀次俗稱與次善鏡と号し姓を野路と改め天下一與次秀次と稱す名工なり三世秀次善紹と号す四世秀次林齋と号し京師に住し茶家遠州流の漆工となりて諸器を製す製品中中次最人の珍賞する所たり中次は抹茶を入るゝ漆器にして其の製大抵高さ一寸五分周り五寸徑り一寸五分轆轤をもて造りしものこれを中分して茶を出たす故に中次といふ其合縫堅密にして抹茶風濕に侵さるなる凖其の子高意了智皆髹技に長し五世與齋六世長庵善齋の門人春慶等亦皆名手の稱あり

藤重藤巖傳

藤重藤巖はもと樽井氏奈良の漆工にして名手の稱あり慶長年間徳川家康公江戸にありて藤巖を召し點茶に用ゐる磁器の欠損を補修せしむ藤巖漆をもて巧に其の缺損を補修して上る漆をもて漆器の欠損を補ふこと實にこの人に始る藤巖又よく漆塗の諸茶器を製す中に就き中次最世人の賞美する所となる

雍州府志漆器條に有稱藤重者元樽井氏而南京之漆工也是漆工羽田氏之類也至今藤重十二代也業七世人剃髪号藤重特為巧乎自茲後不稱樽井從俗訓号藤重是專製中次茶器云々

輟耕録に古へは墨なし竹挺にうるしを点して書す

関宗長傳

関宗長は寛永年間の工人にしてよく諸漆器を製し漆をもて其の器に銘すこれより先漆工の銘は皆彫刻せしものなりしか宗長か漆をもて銘せしより後の漆工皆これに倣ひ彫刻するもの稀也

山打三九郎傳

山打三九郎は飛騨の漆工なり延寳天和の比出

傳統記に寛永年間石岡庄壽記なる者能代塗の髹法を發明し巧妙を極めたるをもて秋田藩主の殊遇を被り傳へて七代の俸禄を受るに至る云々

羽國山本郡能代に来り漆器を製す世人これを能代塗といふ其の製は即春慶塗の精製にして透明一点の塵なし工人業を傳へて今日に至る

塗師雜傳

塗師の名諸書に散見して其の傳の記すへきなきは記参余参紹鷗の時代寸法齋宗長宗旦の時代道意近藤將監と稱す道惠世々源助と称す道志石州遠州の家の塗師西道喜同道円同桐村紹鷗時代遠坂守兵衛と稱すの類にして其の工業の塗師に類して少しく異なるは一閑張なり塗泥

なり一閑張の製は京師の人笹屋才右衛門を巨
擘とし塗泥は雛屋立圓を妙手とす此の他猶多
かるへし他日諸書を繙きて補ふへし